

# テルグ文字

児玉 望

テルグ文字は、南方系のブラーフミー文字のうち、テルグ語の話されているデカン高原南東部アーンドラ地域で発展し、16世紀のヴィジャヤナガラ朝期までに現在に近い形となった文字です。西に隣接するカンナダ文字とこの時期までほぼ平行して変化してきたものと見られ、活字体で見るとよく似ています。字母本体の上部の高さを揃える北インドの文字と異なり、子音字本体の下部をそろえて書かれますが、上部に付けられる母音記号によって、文字の高さは不揃いになります。また、北インドの文字と異なり、結合子音字母がなく、連続する子音を表すための子音記号が、字母本体の下側に、離して書かれます。

テルグ文字を使用する主な言語は、アーンドラ・プラデーシュ州の公用語であるテルグ語（約7000万人）です。州内の少数民族の言語にも、テルグ文字を用いた正書法が考案されています。伝統的には、サンスクリットもテルグ文字で表記されました。デーヴァナーガリー文字と一対一に対応する字母や記号があり、サンスクリットの表記には差し支えがありません。このためテルグ語の正書法では、サンスクリットからの借用語がそのままの綴り字で多用され、発音も、本来テルグ語に存在しなかった音も含め、なるべく原音に忠実であるべきだとされています。いっぽう、テルグ語の表記のために追加された字母は、母音 e, o の長短の区別など、わずかです。

字形の中で特徴的なのは、タラカトゥと呼ばれる字母上部の一画で、起源は北インドの文字上部にひかれる線と同じです。この線は、本来は字母の縦画と、上部につく母音記号を隔てる役割をもっていたと見られますが、タラカトゥはその歴史を反映して、本来縦画のなかった字母にはつきません。また、上部につく子音記号とは融合してしまいます。下にあげる例は、テルグ語の挨拶の言葉です。

నామాకారం

na ma skā raṃ

skā は、sā と、k を表す子音記号の組み合わせで表します。母音記号 ā が上部についているため、タラカトゥがありません。最後の円は、アヌスワラといって、日本語の「ん」とよく似た音を表わしますが、単独の文字ではなく、raṃ の一部の記号と考えられています。

テルグ数字は日常生活では用いられません。

## [参考文献]

- 中西 亮「テルグー文字」、『世界の文字』、みずうみ書房、pp.38 - 39, 1990.

(町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社 2001, pp. 190-191 より転載)